

日本語教育におけるPAC分析の可能性と課題
- 読解教材を刺激とした留学生への実践研究から -
The Possibilities of PAC Analysis for the Application
to Japanese Language Education
- From a Reading Material-based Research of Learners of Japanese-

丸山千歌（横浜国立大学）

MARUYAMA, Chika（Yokohama National University）

小澤伊久美（国際基督教大学）

OZAWA, Ikumi（International Christian University）

要 旨

本稿は、再現性・信頼性の高い質的研究の方法であるPAC分析を活用した研究事例を紹介し、PAC分析への理解を深めるとともに、紹介するデータを基に日本語教育における教育実践や実践研究について議論を深めることを目的とする。具体的には、教科書にステレオタイプ的な日本像が書かれていた場合、学生はそれを読むことでどのような影響を受けているか、教師はそのような教材を使った授業をどう展開するといった問いに対する研究事例を紹介し、議論を行う。

This paper aims to introduce research using PAC analysis (Personal Attitude Construct Analysis), a qualitative research tool with high reproducibility and reliability, and discusses the educational practice and practical research based on this research. Specifically, it discusses the relationship between learners of Japanese and the Japanese reading materials containing stereotypical images of Japan. It discusses the implications for teachers of Japanese to manage classroom with such teaching materials through the results from this PAC Analysis, and points out the possibilities of PAC Analysis for the application to Japanese language education.

【キーワード】日本語学習者・読解教材・インタラクション・PAC分析・実践研究

1. 趣旨説明

教科書にステレオタイプ的な日本像が書かれていた場合、学生はそれを読むことでどのような影響を受けているか、教師はそのような教材を使った授業をどう展開するといった問い。それを考えるためには学生個人と教材のインタラクションを解明する必要がある。本稿が研究手法として取り上げるPAC分析は社会心理学と臨床心理学の知見を持つ内藤（1991）によって開発された手法で、個人に着目した質的研究でありながら、デンドログラムに基づき、調査協力者自身の枠組みで分析するという、再現性・信頼性の高い質的研究の方法である。筆者らは、PAC分析を実施してみて、これが上記の課題の解決の糸口になるという感触を得た。そこで、本稿は、同じような課題を抱える日本語教育関係者に解決法の一助として研究事例（丸山 2007b）を紹介し、PAC分析への理解を深めるとともに、紹介するデータを基に教育実践や実践研究について議論を深めることを目的とする。

2. P A C分析とは

P A C分析法は社会心理学と臨床心理学の両方の知見を持つ内藤(1991)によって開発された研究手法で、「当該テーマに関する自由連想(アクセス)、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被検者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法」(内藤 2002:1)である。この定義には以下の3つの要点があるように思われる。

まず、「自由連想」である。P A C分析は調査協力者の自由な発想を制限しない、具体的には調査協力者は渡されたカードに自由に語や文を書くことを指す。アンケート調査の場合、調査項目があらかじめ設定されており、インタビュー調査の場合でも、調査実施者が質問内容をあらかじめ設定してインタビューの流れを作っていくので、どちらかという調査実施者主体で実施されることになる。この点、P A Cは調査項目が無限大に設定されていると考えることができる。

次に、「連想間の類似度評定」である。これは調査協力者がカードに書いた語や文の直感的なイメージ上の距離(意味的に近い・遠い)を数値化し、この情報をもとにデンドログラム(樹形図)を作成することを指す。統計的手法により、データの客観性が高まる。

そして、「被検者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告」である。クラスターとは、項目群のまとまりのことである。調査協力者は、カードに書いた語や文の感覚的な距離の情報に基づいてできた上述のデンドログラムを見て、そこに現れた調査協力者自身が挙げた語のまとまり(クラスター)を見ながら、イメージや解釈を報告するのである。調査実施者はその報告や、語の重要順、プラスマイナスのイメージ、最新の理論などを鑑みて総合的な解釈を試みる。このように見ると、P A C分析は、3つのどの段階においても調査協力者が中心となって進められることがわかる。

P A C分析の調査協力者は基本的に1名で「P A Cの手続きの中で、デンドログラムに基づく面接が大部分を占める。」(末田 2001:59)ので、質的研究と言えるが、上述の2点、すなわち調査協力者が自由連想項目について、イメージ上の近さや遠さに基づいてクラスター分析を行うという意味で、P A C分析は量的な調査の特徴がある。これにより、調査実施者は単に調査対象に関わる要因を捉えるのにとどまらず、要因間の関係や概念の構造を把握することが可能になる(末田 2001)。

また、調査協力者による内省報告は、クラスター構造という刺激によりコントロールされているので、再現性が高く、安定的となる。同じデンドログラムから出発して、再現性が高いということは、単独での信頼性の高さだけでなく、相互関連的な信頼性も高いことになる(末田 2001:74)。以上から、P A C分析が、調査協力者の感覚的で自由な発想への制限を可能なかぎり外した、調査協力者が主体となる手法であると同時に、客観性・再現性が高い質的研究の手法である、すなわち事例的研究を理論へと発展させる可能性を持った手法であることが期待できる。

3. 研究事例の紹介

3.1 本研究事例におけるP A C分析の手続き

次にP A C分析を用いた研究事例を紹介したい。本稿は研究事例(丸山 2007b)を基に、P A C分析の可能性を探ることを目的としており、そのためにはP A C分析の手続きや研

究成果の紹介が不可欠である。そこで、以下に丸山(2007b)におけるPAC分析の手続きや結果と考察をまとめる。本研究事例は調査協力者のイメージを分析し、調査協力者がテキストの刺激から発想するものを明らかにすることを目的とする。通常のPAC分析の手順と違う点は、テキストが与えられる点である。筆者らの研究は、日本語学習者と読解教材とのインタラクションについて考えることがテーマなので、この手続きが必要である。なお、以下の手続きは調査協力者の視点から記述したものである。

(1) 契約を交わす

調査協力者は調査の趣旨説明とともに3つの点について尋ねられる。1点目が「調査協力者からの申し出で、いつでもPAC分析を中止したり一部について回答を拒否したりすることができる」(内藤 2000: 43)。PAC分析を活用した研究事例にはコンプレックスや性的欲求など個人の内的世界に深く立ち入るものがある。本稿のケースは日本語の読解教材についての話なのでこの問題は生じにくい。調査協力者が話したくないと思ったときはその気持ちを優先することが基本方針となる。

2点目が録音の許可である。PAC分析は、インタビュー後、調査実施者が総合的考察を行うことで完結する。総合的考察には、記憶ではなく話した内容、声の大きさ、トーン、間なども有効な情報となるので録音を行うが、インタビューは調査協力者との信頼関係の上に成り立つので、録音の許可は重要な手続きとなる。3点目が、公開の可能性の確認である。結果の公開が予測される場合はそれが伝えられ、プライバシーと個人の権益の保護を最優先することが確認される(内藤 2000: 43-44)。

(2) テキストが与えられる

この手続きは今回の研究事例特有のものである。日本語の教科書に掲載されている読み物を読む。テキストの日本語のレベルは中級前半で、辞書が必要かと思われるものについては簡単な語彙リストが付されているので、調査協力者の日本語運用力で容易に読むことができる⁽¹⁾。

(3) 連想刺激文が与えられる

調査協力者が与えられた連想刺激文⁽²⁾は「これは外国人のための日本語の教科書です。あなたはこの文章に書かれている日本について、どう感じましたか。あなたの感じたことを、言葉やイメージで表してください。書く時には思いついた順に、順位の番号をつけてください。」である。この連想刺激文は、紙面に書いた形で渡されると同時に、調査者により口頭でも与えられる。

(4) 思いつくままに連想したことばを1語ずつ1枚のカードに書く

用意されたカード10枚に、思いついた順に1枚に1語ずつ書く。語が短文でキーワード的に書き、情報を盛り込みすぎないようにする。カードの枚数は、調査の内容と実施時間との兼ね合いで考えるが、本研究事例は10枚とした。実施してみて調査協力者が書き足りないという雰囲気ではなく、10枚で十分だった感触を得た⁽³⁾。

(5) カードを重要な順に並べる

想起順になっている(4)のカードを、重要度順に1から10までに並べ替える。

(6) カードの組み合わせのイメージの近さを直感的に7段階で評価する

カードを2枚ずつ選び、直感的なイメージで、各ペアがどの程度類似しているかについて、「非常に近い(1)」から「非常に遠い(7)」までの7段階で評価を行う。

(7) 休憩に入る

調査協力者は休憩中に入り、事前に用意されていたフェイスカードに記入するなどする。その間、調査実施者（筆者）は(6)の情報（連想項目間の類似度距離行列）をコンピューターに入力し、デンドログラム⁽⁴⁾を作成する⁽⁵⁾。

(8) デンドログラムに基づいたインタビューを受ける

休憩中に作成されたデンドログラムを見ながら、インタビューを受ける。具体的には、まとまりを持つクラスターとして解釈できそうなグループを調査協力者が提示し、まとまりだと思ふ理由やクラスター間の関係、各項目のイメージなどを調査実施者からの質問に答える形で説明をする。質問はオープンクエスチョンを基本とし、調査実施者はインタビューの過程では判断を下すことなく、調査協力者の発話を受け入れる。

(9) 各連想項目のイメージ（プラスかマイナスか）を評価する。

各連想項目の単独のイメージが直感的にプラス（+）、マイナス（-）、どちらともいえない（0）のいずれに該当するかを答える。

使用言語は、本来は調査協力者が思っていることが自由に表現できるよう母語で行うことが適切であるとされている⁽⁶⁾が、本研究事例では本人の希望により日本語で行い、表現が不十分であると調査協力者が判断したときに適宜母語（英語）を使用する形式をとった。

3.2 研究事例におけるPAC分析の結果⁽⁷⁾と考察

本研究事例でPAC分析によって析出されたデンドログラム（図1）⁽⁸⁾には、3つのクラスターがある。結果と考察の詳細は丸山(2007b)にあるので、本節では本稿の目的であるPAC分析の可能性と課題を探る上で必要な箇所のみ簡単に取り上げたい。

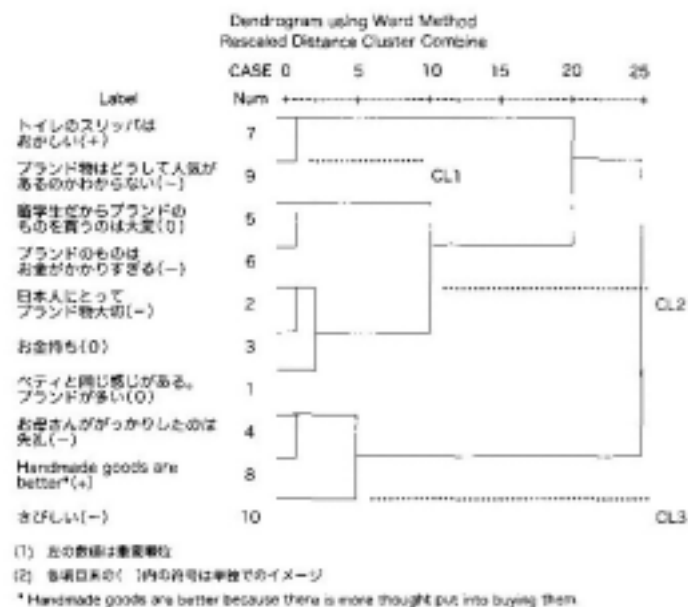


図1 調査協力者のデンドログラム—テキストから感じる日本のイメージ

まず、調査協力者はクラスター1を”bland overload”と命名した。調査協力者は通学

途中の電車の車両の中などで、ブランド品を持っている人がどのくらいいるか数えると述べており、日本人のブランド志向に対し普段から高い関心を寄せている様子がうかがえる。そして今回の読み物を読み、日常生活の中でトイレのスリッパにまでブランド品を使うことに対して過剰使用であると反応した。生活の細部にまで行き渡るブランド志向に驚き、それは“Follow like sheep”、“It means like you just want to look the same, not individual”、すなわち他に追従するだけで個性がないと批判した。このことは、調査協力者が持っていた日本人のブランド志向のイメージがこの読み物によって強化されたことを示唆している。

次に、調査協力者はクラスター2を「wasting money、ブランド」と命名した。調査協力者は、ブランド品を使うことは「すごくお金がかかる」し、全員がお金持ちでもないのに、「毎日、何人も、みんな持ってる」と指摘した。各自が自分のイメージにあったものを選ばずにブランド品を使うのは、「みんな金持ちのイメージがほしい」からであり、ブランドの品質ではなく高級品だというイメージへの志向があるのだろうと分析し、留学生にはそのような価値観はないと述べている。ここでは調査協力者は、読み教材の主人公ベティーの経験と感情に同調し、ベティーの考えを代弁しているようである。また、日本人のブランド志向は来日前に旅行番組などで紹介される日本の映像や情報から感じていたが、留学してそのイメージがさらに強化されたとも述べている。そのことは、調査協力者が持っていた日本のイメージは、調査協力者が直接体験したことだけでなく、メディアなどを通して得た間接的な体験からも構築されており、読み物を読む際にそれらが影響を与えていることを表している。

最後に、調査協力者はクラスター3を「失礼」と命名した。調査協力者は、読み教材に出てくるベティーのお土産は非常に心のこもった物のはずであるのに、それを受け取った「お母さん」が消極的な評価を表情に出すのは、人として「失礼」であり、ベティーは「さびしい」と感じたはずだと述べ、ベティーの経験に対する判断を下している。

デンドログラムによってクラスター構造を見てみると、調査協力者自身の観察と「読解」という経験による日本のブランド志向の状況把握「bland overload」(クラスター1)が、ベティーの考えを代弁しているとも言える日本のブランド志向への評価「wasting money、ブランド」(クラスター2)に結節し、これがさらにベティーがホストファミリーとの間で経験した出来事への判断である「失礼」(クラスター3)に結節している。つまり、読み教材からの情報と調査協力者の経験の両者を用いた状況把握に基づいて状況への評価を行い、最終的にベティーの経験に判断を下すという構造が表れているのだと言えよう。

この結果から考察されることとして、まず、調査協力者の発話は直接または間接的な体験に基づくものが多いということが指摘できる。つまり、読み教材を読んで内容について考える際に、それに関連した読み手自身の経験と関係づけられて読み物についての判断がなされているのである。また、その調査協力者の経験には調査協力者自身の実体験という直接的な体験と、メディアなどを経由した間接的な体験とがあることもPAC分析のデータには具体的な形で現れた。

筆者らは日本語学習者が読み教材から感じることは、読み教材そのものが内包する情報やイメージだけに左右されるのではなく、学習者要因、特に学習者個人が経験してきた日本社会や日本人との関わりが反映されていると予想していたのであるが、本研究事例からは、それが裏付けられただけでなく、予想以上に読み手の「個」が深く関与しており、個

人の豊かな内面が反映されていることがわかった。そのことは教材の作成や提示の際に、読み手である学習者個人の体験といった個人的要因をより強く意識する必要性を示唆すると共に、学習者同士の相違も大きくあるであろうことを予感させ⁽⁹⁾、教室に集う学習者の多様性を生かした授業運営が必要であることを示唆している。

4. 研究事例が示唆するPAC分析の可能性と課題

丸山(2007b)は、日本語読み教材と学習者とのインタラクションの解明におけるPAC分析の可能性として、PAC分析の基本となる「自由連想」とデンドログラムを用いた解釈・イメージの説明を指摘した。また、授業運営への示唆として教室内の多様性の可能性を指摘し、教材開発・授業設計への示唆として、留学生が持つステレオタイプのイメージの教材による強化、留学生個人の読みの違いを生かした協働的活動による学びの深化、そして教材の提示のし方の工夫の可能性を指摘した。本稿はさらに実践研究フォーラム⁽¹⁰⁾での議論も踏まえ、日本語読み教材と学習者とのインタラクションの解明と、日本語教育におけるPAC分析の活用の可能性と課題について考えたい。

4.1 学習者と教材とのインタラクションから考えるPAC分析の可能性と課題

まず、本研究事例が与える学習者と教材とのインタラクションに関連する示唆について述べる。調査協力者の読みは、その学習者の先入観・経験が大きく影響していることが観察されるということは丸山(2007b)でも指摘されているが、それは実践研究フォーラムで指摘されたことの一つでもある。観察結果をどう生かすかは、PAC分析実施者側の気づきの深さと、その気づきを他の学習者とどうシェアするかという授業実践への反映への意識と工夫とにかかってくるであろう。また、丸山(2007b)と同様に、教材が学生のステレオタイプを強化しているのが読み取れるという指摘が出、ここから示唆されることとして、教材を読みっぱなしにするのではなく、補完する教材を提示したり、同じ教材でも他の視点・感想を持つ学習者とのディスカッションをしたりするなどして、ステレオタイプの情報とのバランスを取る授業活動の工夫の可能性が考えられることが指摘された。他の読みをする学習者と意見を出し合うためには、彼らの経験を出しやすいタスクを準備する必要があるという意見もあった。

丸山(2007b)で言及されていない、学習者と教材とのインタラクションの理解における活用の可能性としては、学習者と教師の間の教材理解についてのずれを認識するのにPAC分析がツールとして役立つのではないかという意見や、本研究事例のデータが示すような「読み」がなされていることを考えると、教材選定の段階で、学習者が関心を持ち話題を膨らませる活動ができる教材かどうかを検討する必要性もあるという意見が出た。

課題としては、研究計画の絞り込みが挙げられる。PAC分析の開発者である内藤⁽¹¹⁾は、PAC分析実施前の研究計画段階において、研究の全体像とそれに対するPAC分析の位置づけとをしっかりと検討する必要性を強く訴えており、分析の目的や対象を絞り込まずにPAC分析を実施しないよう注意を喚起しているが、これは特に帰納法的位置づけでPAC分析を活用する際の課題であろう。この研究課題の場合、帰納法的位置づけ・演繹的位置づけの両方でPAC分析を用いる可能性が考えられる。PAC分析の「無限の変数の設定」という特徴を生かすと、PAC分析を予備調査的位置づけで実施することは、調査

実施者が予測しなかった変数を盛り込んだアンケートなどの量的調査を可能にする。また、予備調査のPAC分析により、既存の理論を覆す反例が予測できたり、新たな理論構築の端緒となりうる変数が予測できたりした場合には、その次の段階において演繹法的位置づけでのPAC分析を実施することが可能になるであろう⁽¹²⁾。筆者らは丸山(2007b)などのPAC分析の事例から、日本語学習者の日本人・日本社会との関わりという学習者要因が教材とのインタラクションに影響を与えているという感触を得ているので、丸山(2007b)の次段階は、演繹法的位置づけでPAC分析を実施することが考えられる。

4.2 その他の日本語教育研究での活用におけるPAC分析の可能性と課題

次に、本研究事例に基づいたPAC分析についての考察を発展させ、丸山(2007b)では議論されていない、PAC分析の日本語教育への活用の方向性について考える。

PAC分析活用の可能性は、特に、従来の分析方法では探り得なかったような個人の内的世界についての気付きを得られるというPAC分析の特長に負うところが大きい。例えば教師養成や現職教員研修の際に教師の思考を含めた広い意味での「態度」についての気付きを得るためのワークショップとしてPAC分析を活用する可能性が指摘できよう。PAC分析を縦断・横断的に実施することで得た知見を教師養成に活用する可能性は才田(1997、1999)で既に議論されているが、実践研究フォーラムでは現職教員研修において自らのピリーフを認識するために活用するなどの可能性が指摘された。それ以外では例えば、新人教師とベテラン教師の授業レポートなどの比較で、新人教師は観察した授業にとって大切なことという視点からではなく自分自身の授業との関連でコメントを述べている可能性が指摘されている(小澤・嶽肩・坪根 2006)が、具体的にどのような個人的体験が授業観察に反映されているかをPAC分析によって明らかにするといった活用法も考えられる。PAC分析の活用によって、従来「授業において重要であることに十分気付きが得られない」と判断されがちであった新人教師の思考が、実は観察対象の授業にとって重要な事象ではなく観察者本人にとって意味を持つ事象への言及によって成り立っていることが立証出来れば、同僚などからよりよい理解を得ることが可能になるだろう。

他者理解のためのよい資料を提供できるという意味で、PAC分析は、個々の日本語教師が対峙する人間関係の改善にも活用出来るだろう。日本語教師は様々な関係の中で無理解感などの「溝」を感じている(小澤 2005a)が、一方でその対処としてアサーションなどによって自分達自身のみが変わっても相手が変わらなければ問題は解決しないという声も多い(小澤 2005b)。このような問題の解決にあたっては、相手に変革を促す前に、まず、対峙している相手のことを十分に理解する必要があるが、その際にPAC分析によって相手自身も無意識であるような態度構造を明らかにすることは有効だと考えられる。このことはプログラム評価にも応用が可能な点であろう。札野(2004)は、日本語教師や学習者だけではなく関連する組織の人間にも評価へ参加してもらい、多角的に評価を出すことが、プログラム改善のために有効であり重要であると述べているが、日本語教育以外の者にインタビューをする際にPAC分析を活用することで、調査実施者である日本語教育関係者の想定を超えた回答を引き出すことが可能になると考えられる。

実践研究フォーラムでは、調査実施者の想定を超えた回答を引き出せるというPAC分析の特長を、学習者自身の日本語授業に対するニーズ・授業活動に対する具体的な要望が

明確に把握できない場合に、学習者の意識を探る（掘り起こす）ために活用したり、授業の振り返り作業の一環として授業評価に活用したりする可能性が挙げられた。但し、教師が自分の対峙する学習者を知るという意味で実施するのでなく、理論化したり、そのための変数を探したりすることが目的である場合には、このトピックについては先行研究もあるため、まず十分に先行研究を調査することが必要であろう⁽¹³⁾。

なお、上述のように他者理解の一助としてPAC分析を活用する場合、PAC分析を受けた協力者自身がPAC分析の過程で自分自身の態度構造について気づきを得る可能性が高いことから、そのことによる効果も期待される。実践研究フォーラムでも、日本に不適應を起こした学生のカウンセリングとして活用する可能性が指摘されたが、同時にカウンセリングの専門家ではない日本語教師が不用意にこのようなケースに携わることの危険性が指摘され、調査実施者側の準備が十分に整っていない段階での軽率な活用は留意すべきという意見も出た。内藤（2002）でもPAC分析が不用意に他者の心理的内面を暴いてしまう危険性について十分な認識が必要であると注意を喚起しており、カウンセリングの専門家ではない者が安易にPAC分析をそのような目的で利用することは避けるべきである。

その他の課題として、PAC分析は、意思表示が自由に行える言語運用力が必要であることから母語が基本となる点、また本稿の研究事例に見るように1調査あたり相当な所要時間が必要になるという点が挙げられた。内藤（2002）に言及されている、PACを受ける側の年齢や抽象化する能力などの特性がPACの成否に關与するという点についても指摘が出た。研究計画の段階で、それらの点を熟慮する必要があるだろう。

最後に、PAC分析による研究成果とは別に、データを見ていて考えさせられることは、本研究事例のように中級レベルの日本語力の学習者が多少の英語を補助的に用いつつもかなり長時間にわたって日本語で、まとまった内容について話をしているという事実である。しかも、その間の調査実施者である教師の発話は、学習者の発話を促すための質問や確認、あいづちといったごくわずかなものでしかなく、ほとんどは学習者の発話である。日本語の授業運営において、学生の声を傾聴することの教育的意義や効果、教師自身の発話行動のあり方を問うという意味で、自分の、あるいは他者のPAC分析のインタビュー・データを見直してみることは有効ではないかと考えられる。

5. おわりに

本稿は、再現性・信頼性の高い質的研究の方法であるPAC分析という研究手法を取り上げ、それを活用した日本語教育の研究を例に、PAC分析の特徴や実施方法を具体的に紹介した。また、その研究事例のデータを基に、日本語教育における教育実践や実践研究にPAC分析を活用した場合の可能性と課題について論じた。PAC分析には様々な可能性があるが、その活用には、PAC分析実施者がPAC分析の特徴と限界を十分に理解した上で研究計画における位置づけをしっかりと検討し、PAC分析を活用した先行研究を把握して活かすことが必須であるという内藤の指摘を忘れてはならない。本稿が、より多くの日本語教育関係者がPAC分析のよりよい活用法を模索する一助となれば幸いである。

* 本稿は、平成19・21年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）「PAC分析法を活用し

た学習者が日本語教材から受ける影響と学習者要因の解明」(研究代表者：丸山千歌、課題番号：19520449)の取り組みの一部である。

- (1) テキストの選定は筆者ら2名で、日本語のレベル、内容、教材の普及度などの観点から行った。本調査で採用したのは、三浦・マグロイン(1994) "An Integrated Approach to Intermediate Japanese" The Japan Times の第8課の速読の文章である。「ブランド志向」という題で、日本人の家庭にホームステイをした留学生ベティーの体験が綴られる。来日前にホストファミリーの家族それぞれにおみやげを準備し、お母さんに手作りのバッグをあげたところ、あまり喜ばれずがっかりする。その後、そのお母さんがトイレのスリッパにまでブランド品を使うほどのブランド志向であったことに気づくという内容である。本稿は、読解教材が学習者に与える影響を観察することが目的なので、観察しやすさを優先しステレオタイプ性の高い内容のものを採用した。
- (2) 刺激文は、筆者ら2名で検討した。
- (3) インタビュー全体の所要時間は約3時間であった。
- (4) (6)に基づいて作成された類似度距離行列に基づき、筆者がワード法でクラスター分析を行った結果析出されたデンドログラム(樹形図)である。
- (5) 今回の研究事例で使用したソフトはSPSSだが、内藤(2002)はHALBAUを推奨している。研究事例を見ても、SPSSを使用するものもあるし、HALBAUを使用する例もある。今回SPSSを使ったのは、調査協力者がグループを作りやすいのではという感覚があったということと、筆者が受けたワークショップでは、カウンセリングに使用した例だったが、デンドログラムを使って、調査協力者が自分の考えを整理していくことができるという紹介を受けたという理由がある。HALBAUとSPSSのどちらを今後採用するかは、これから検討したい。
- (6) 2005年5月27日異文化間教育学会プレセミナーでの講義(講師：井上孝代・末田清子・伊藤武彦)に基づく。
- (7) 本研究事例のPAC分析による具体的なデータは紙幅の都合で省略する。詳しくは丸山(2007b)を参照されたい。なお、デンドログラムなどの一部資料は2007年度実践研究フォーラム当日に配布しており、<<http://publicize.exblog.jp/6654405/>>から入手可能である。
- (8) 図1は丸山(2007b) 168頁に掲載のものである。
- (9) 丸山(2007b)では、別の調査協力者に対するPAC分析調査の結果についても論じており、それによればやはり同じ読み物を刺激としていても、浮かべるイメージはかなり異なっている。
- (10) 2007年度実践研究フォーラムでのワークショップ「PAC分析データを基に実践研究を考える・読解教材を刺激とした留学生への質的調査から」(2007年8月5日 於早稲田大学)を指す。
- (11) 「第1回PAC分析と日本語教育研究会」(2007年10月20日 於横浜国立大学留学生センター)における内藤哲雄先生の講演から示唆を得た。
- (12) 同上。また同講演からは、演繹法的手法こそが心理学専門家が実施するPAC分析の主な手法であることが確認された。これは実践研究フォーラムで議論されなかった点であるが、稿を改めて議論したい。
- (13) 注11に記載の内藤哲雄先生の講演でも、日本語教育におけるPAC分析は多く見られるようになってきたので先行研究を把握することの重要性が指摘された。

参考文献

- (1) 安龍洙・渡辺文夫・才田いずみ(1995)「韓国人日本語学習者の授業観の分析 授業に対する認知的変容についての事例的研究」東北大学文学部編『東北大学文学部日本語学科論集』5、1-12.

-
- (2) 安龍洙・渡辺文夫・内藤哲雄 (2004) 「日本語学習者と日本人日本語教師の授業の比較 個人別態度構造分析法 (P A C) による事例研究」茨城大学『茨城大学留学生センター紀要』、49-59 .
- (3) 小澤伊久美 (2005a) 「日本語教師が直面する多様な『溝』を乗り越える・1. 『溝』に関するアンケート結果報告」小出記念日本語教育研究会『小出記念日本語教育研究会 論文集』13、60-73 .
- (4) 小澤伊久美 (2005b) 「日本語教師が直面する多様な『溝』を乗り越える・分科会報告」小出記念日本語教育研究会『小出記念日本語教育研究会 論文集』13、98-100 .
- (5) 小澤伊久美・嶽肩志江・坪根由香里 (2006) 「日本語教育における教師の実践的思考に関する研究 (2) 新人・ベテラン教師の授業観察時のプロトコルと観察後のレポートとの比較より」ICU日本語教育研究センター『ICU日本語教育研究』2、1-21 .
- (6) 才田いずみ (1997) 『平成 7 ~ 8 (1995-1996) 年度文部科学研究費時補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書 課題番号 07680303 日本語教育における実習生と学習者の認知的・情意的変容の研究』 .
- (7) 才田いずみ (1999) 『平成 9 ~ 10 (1997-98) 年度文部科学研究費時補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書 課題番号 09680294 日本語教育実習における実習生と学習者の態度変容の研究』 .
- (8) 末田清子 (2001) 「留学生体験の意味付け・大学生の留学前及び帰国後の滞在国に対するイメージ分析を通して」シーター・ジャパン『異文化間コミュニケーション』4、57-74 .
- (9) 内藤哲雄 (1991) 「同性・異性への好意と嫌悪」『日本社会心理学会第 32 回大会論文集』 .
- (10) 内藤哲雄 (1993) 「個人別態度構造の分析」信州大学『人文科学論集 信州大学人文学部』27、47-69 .
- (11) 内藤哲雄 (2000) 「留学生の孤独感の P A C 分析」信州大学『人文科学論集 人間情報学科編』34、15-25 .
- (12) 内藤哲雄 (2002) 『P A C 分析実施法入門 [改訂版] 「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版 .
- (13) 内藤哲雄 (2004) 「P A C 分析の適用範囲と実施法」マクロ・カウンセリング研究会『マクロ・カウンセリング研究』3、52-89 .
- (14) 内藤哲雄・金娟鏡 (2005) 「発達障害のある幼児をもつ韓国人母親の障害受容に関する P A C 分析・社会的支援体制と育児ネットワーク機能の視点から」信州大学『人文科学論集 人間情報科学編』39、11-25 .
- (15) 札野寛子 (2004) 「『プログラム評価』とは何か：基本概要とケーススタディ」『大学教育学会誌』26、107-118 .
- (16) 藤田裕子・佐藤友則 (1996) 「日本語教育実習は教育観をどのように変えるか・P A C 分析を用いた実習生と学習者に対する事例的研究」日本語教育学会『日本語教育』89、13-24 .
- (17) 藤田裕子 (2007) 「インターネットを利用した作文授業の効果・日本語で書くこ

- とに対する留学生の態度構造の変容」『桜美林言語教育論叢』3、17-31 .
- (18) 丸山千歌(2007a)「日本語学習者が日本語読解教材から受ける影響・読解内容を知る上でのPAC分析法の有効性」横浜国立大学留学生センター『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』14、145-158 .
- (19) 丸山千歌(2007b)「日本語教材の文化トピックからの学習者の発想・学習者とのインタラクションの解明に向けたPAC分析の可能性」『日本語教育のフロンティア』くろしお出版、161-184 .
- (20) 三原 祥子・景山 陽子・澤田 尚美・矢部 まゆみ(2002)「教師の自己研修における協働アクション・リサーチの可能性・PAC分析による検証」日本語教育学会『2002年度日本語教育学会春季大会予稿集』、185-192 .
- (21) 横林宙世(2004)「日本語教員養成課程履修生の考える『良い日本語教師』のイメージ(1)」西南女学院大学『西南女学院大学紀要』8、107-116 .